

2017年1月8日 主日礼拝説教(要旨)

聖書：ルカによる福音書18章9～14節

説教「義とされて帰った人」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

ファリサイ派の人と徴税人という二人の対照的な祈りを題材とした主イエスのたとえ話です。「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対して」語られたのだとルカは説明しています。たとえ話の内容から、正しい人間だとうぬぼれているのはファリサイ派の人々のことだろうと私たちはすぐに思うのですが、主イエスはファリサイ派の人たちに語られたとは書かれていません。自分を正しいとし、他人を見下しているということで、いったい自分は関係ないと言える人はいるでしょうか。私たちは正しさをかかげて人を裁き、正義をかかげて戦争をします。正しさに固執するところから悪や矛盾が生じてくることがあります。このたとえ話は「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」と結ばれます。つまり、ここで語りかけられているのは私たち一人一人であり、私たちが神の前にどう立っているかということが問われているのです。

さて、二人の人が祈るために神殿に上ったのですが、ファリサイ派の人は心の中でこう祈ります。「神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を捧げています」。極端な言い方ですが、語られている内容は彼らの生き方を映し出したものでした。ファリサイという名前は汚れたものから分離するという言葉から生まれたと言われますが、彼らはユダヤが国を失い、ペルシャ、ギリシア、ローマと次々と世界の大国の支配下に置かれていく中で、異教的世俗的な生き方を断固拒否し、律法と先祖伝来の教えに忠実な生き方をしていたのです。使徒パウロもかつてはファリサイ派に属するユダヤ人であったが、自らを顧みて「律法の義については非の打ちどころのない者であった」と言っています。

しかし、ファリサイ派の人は神に祈るのですが、そこに神との生きた関係があったのかが問われなければなりません。「心の中でこのように祈った」とは、直訳すると「自分自身に向かって祈った」です。独り言です。確かに彼は「神様」と呼びかけてはいるのです。そして神様に感謝しますと言っています。けれども、そこで数えているのは自分の行為であり、神よりも自分の正しさを信じ、よく頑張ってきた自分を評価しているのです。彼はまた、自らの正しさのゆえに、自分たちと同じように潔癖な生き方をしない人を見下すような生き方になっていました。彼は心の中で「この徴税人のような者でもないことを感謝します」とつぶやきますが、同胞から悪辣な仕方で金をとりたてる徴税人の生活などはとうてい受け入れられるものではありませんでした。

一方、やはり神殿にやってきた徴税人は、注意してみると祈ったとも書かれています。ただ遠くに立って、目を天にあげようともせず、胸を打ちながら、「神様、罪人のわたしを憐れんでください」と絞り出すように言ったのでした。彼は神の憐れみと赦しなしに自分は到底生きていけないということを知っており、ただそれだけを求めたのでした。その叫びは、誰の耳にも届きませんでした。神は聞き上げてくださったのです。主イエスは「言うておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない」と言われました。祈れない思いの中で神を呼ぶ徴税人のところに神は共にいてくださったのです。

ところで、この二人の祈りを読み比べる時、私たちはおそらく徴税人の祈りに共感し、自らの立派さを並べるファリサイ派の人の祈りには不快感や嫌悪感をいだくのではないのでしょうか。自分が祈るとすれば、それは当然、徴税人の祈りに近いものになるだろうと考えます。けれども、うっかりすると私たちは徴税人の立場に身を置きながら、こんどは「私はこのファリサイ派の人のような者でないことを感謝します」と心の中で言い始めはしないのでしょうか。つまり、神様の名を呼び、罪を悔いることにおいても、変な意識が頭をもたげてくるのです。あの人もこの人も自覚がたりない、謙遜がたりないと思いはじめます。徴税人だってすぐにファリサイ派の人になれてしまうのです。そこに私たちの落とし穴がある。だから私たちはこの話を他人事として気楽に読み過ごせないのです。

しかし、神に義とされて家に帰った徴税人の場合、そんな余裕はどこにもありませんでした。彼はそもそも神殿の正面で祈るファリサイ派や周りにはいる人々のことは何も見ていません。他の人々のことを眺める余裕もなかったし、その必要も感じなかったのです。人々が自分をどう見ているかとか、人々と見比べて自分がどうかといったことには関心がなかったのです。彼は神の前に一人で立ちました。目を天に上げようともしませんでした。神に向かい、神に赦していただくことだけを願ったのです。その祈りを神は聞き上げ、応えてくださったのです。

私たちの信仰生活はただ神の目の前に生きるということです。人と見比べるのではなく、自分を覗き込むのでもありません。ただ神を見上げることです。すべてをご存知の神に私のすべてを見ていただき、赦しをいただくことです。周りの人々との関係の中で生まれる相対的評価ではなく、神からいただく罪の赦しと和解という絶対的評価をしつかりと大切に受けとめていきたいものです。

私たちは信仰の正しさや熱心さにおいても罪を犯します。しかし、そのような私たちに憐れみ、赦し、受け入れるために主イエス・キリストは来てくださいました。私たちが義とするために、主イエス・キリストは十字架につき、復活されました。それによって開かれた神との確かな交わりの中で、私たちは祈りに生きる者とされているのです。